

第 70 話<吹谷鉾山>の要約と参考資料

第 70 話<吹谷鉾山>の要約

土呂久には、外録鉾山と別に吹谷鉾山がありました。大正年間に操業した期間は短く、ヒ
鉾の産出量もわずかでした。昭和になって吹谷鉾山の責任者になった松尾一男さんは、元
パイロットという異色の経歴。ハンマーと袋を持って山を歩いて、探したのはスズの鉾石
でした。

第 70 話<吹谷鉾山>の参考資料

70-1 吹谷鉾山

福岡鉾山監督局管内鉾区一覧より

大正 14 年 7 月 1 日現在

採登 65 号 岩戸村 吹谷鉾山 銀、銅、鉛、亜鉛、砒 236,640 坪

渡辺録太郎 東臼杵郡恒富村

大正 15 年 7 月 1 日現在

同上

昭和 4 年 7 月 1 日現在

同上

昭和 5 年 7 月 1 日現在

採登 65 号 岩戸村 吹谷鉾山 銀、銅、鉛、亜鉛、砒 236,640 坪

昭和 4 年 亜砒酸 3,937 キロ 渡辺録太郎 東臼杵郡恒富村

昭和 6 年 7 月 1 日現在

採登 65 号 岩戸村 吹谷鉾山 銀、銅、鉛、亜鉛、砒 236,640 坪

中島門吉 東京市牛込区高谷仲之町 10

昭和 7 年 7 月 1 日現在

採登 65 号 岩戸村 吹谷鉾山 銀、銅、鉛、亜鉛、砒 236,640 坪

関口暁三郎他 1 東京市牛込区市ヶ谷河田町 11

昭和 8 年 7 月 1 日現在

同上

宮崎県統計書より

大正 14 年	採鉾	精鉾	製出高	製品販売額
吹谷鉾山	14,000 貫	12,100 貫	亜砒酸 8,500 斤	701 円
				—

昭和4年

吹谷鉦山 27トン — 亜硫酸 3,937キロ 461円 3,937キロ 164円

70-2 梨の木坑

佐藤実雄さんの話（1978年2月15日聴取）

梨の木坑という坑内を掘っていた。梨の木坑は4番坑より上にあった。

佐藤実雄さんの話（1978年4月12日聴取）

梨の木坑の外に広場があった。300~400年前のズリの山。このズリを掘り返して中島が錫をとった。草も何もはえんズリの山。

70-3 生き埋め事故

佐藤仲治さんの話（1976年10月聴取）

わたしと年吉さんが二番坑で亜硫酸を焼いておったころ、梨の木坑に鶴江さんのおじさんの勝次郎さんと甲斐嘉市さん夫婦の3人が鉦石掘りに行っとなって埋まった。

朝、雨が降りよった。傘を坑口の前に干して入ったらしい。翌日、前の日休んだ人が仕事に出てみて、傘は干してあるが、人がおるかおらんかわからん。「下がりの口が割れとる。来てみてくれんか」と人を呼び集めた。「いつ入ったもんか」。今日か昨日かわからん。とにかく入ってみらな一。わたしたちが入った。わたしは下の三番坑に連絡に下った。川田の監督のもと下で働いている砂太郎さんが来た。どうしようもない。年吉さんが、固い岩盤を叩くと、合図があった。しかし、下がりの割れ目が広がって、どうもできん。岩戸の消防団を招集、向土呂久の一二三さんの父忠行さんが、見立鉦山に行っって詳しいというんで呼んできたり……。三日三晩たって掘り出したとき、3人は革帯を噛んで、5銭銅貨を噛みしめてしもちよった。銭かなんかわからんごつなっていた。

NHK 宮崎放送局放送部編「日向今と昔」P87より

昭和3年（正しくは4年）坑内の落盤によって3人が生き埋めになる事故が起きた。5月4日晚、生死の間をさまよった甲斐嘉市さんとヒサさんの夫婦はようやく助かったが、当時としては、全く奇蹟的な生還であった。

30年前に坑山に埋まって本当に生きる死ぬの目にあいました。ガスランプをともしで見まわっていたら、下にばあさんともう1人が下って横洞の1間ばかりの穴に入っていました。早く下らんと危ないがと云うもんだから、私も下りました。これからタバコを一服すおうかなとマッチをすったと同時にドーンという音が穴にぬけたんですネ。どんどん石ころが下に埋まって、もうどれだけ埋まり上がったかわからん。それ

からもう仕方がないもんだから出ろうとしてから、もがいたけど3人とも出られず、……こりゃひもじいから食べ物を用意せにゃいかん、食べ物がないのでバンドをかじったり、又10銭5銭の金をかじったり、又のみの頭をねぶってナ、上の子が小学校3年でしたもんネ、子供がおるからどうでんこうでん生きて上らにゃならんがと思ちよったわけですが、3日目ぐらいから上から掘る音がわかったんですもんナ、そしたらずっと元気づいたですもんナ、そして上から声をかけたっですわ。どうしているか！皆大丈夫か！と云うたですわ。3人共大丈夫じゃわとおらんだんですわ。そしたら掘る音はげしくなってますネ、坑内の仕事は恐しゅうしてネ、それっきりやめました。こわかったですわ。

*岩戸にある墓に、甲斐嘉市は昭和45年10月（日は不明）死亡と彫ってある。

佐藤実雄さんの話（1980年3月16日聴取）

私は大牟田の三池炭鉱におった。朝日新聞をとりよった。それに、土呂久鉱山で佐藤一郎所有の鉱区で鉱夫3人生き埋めの記事が載った。昭和4年に事故が起こったのは間違いない。直記の転落事故よりあと。1か月も立ってない感じ。いやまた、たいへんなことが起きたと思った。

*富高直記（実雄の妻ハルエの弟）の鎮魂碑（土呂久道路の脇）に「昭和4年5月4日 本道路改工事（1字不明）為至死 富高直記 行年15歳」とある

佐藤実雄さんの話（1978年3月4日聴取）

梨の木坑は掘進の難しいところだった。天井が、道に敷く小砂利の状態で、ちょっと隙間があれば、ザーと落ちてくる。素人は止めきらん。天井に矢板をいれて止めていたが、その（生き埋め事故の）ころは板もなくて、^や矢木で止めた。その隙間から落ちてきて、矢木も折れてドツと来た。3人はちょうど横坑があったので助かった、という。水も旧坑に流れ込んで、たまらずによかった。

佐藤一郎が4、5人に掘らしたらしい。何を掘ったかしらんが、探鉱だったのではないか。生き埋めを見つけたのは、上村のタツという人と聞いている。落盤じゃなくて「山くえ」だ。

佐藤捨光さんの話（1977年5月3日聴取）

わしはやめていたが、応援に呼ばれた。皿糸の竹治さんも行っった。坑内の経験があるから連れて入った。鉱山の人と交替して掘った。富高勝次郎さんと甲斐嘉市とヒサさんが埋まっった。山裏の職頭の矢野ちゅういちを雇ちきて、検討してもろて、それから仕事を始めた。昔の人が頭から掘ったあとにズリをつめとったら、その下をすかして掘ったもんじゃから、崩れたという話よ。竪坑のズリを止めたっちゃ、その間からザーち落ちてくる。

70-4 佐藤一郎さん

佐藤繁熊さんの話（1976年聴取）

茅野鉦山と土呂久鉦山の鉦山長をしていた。

70-5 松尾一男さんの時代

「口伝 亜ヒ焼き谷」P112より

松尾一男を歓迎する飲み方が「樋の口^{ひのくち}」で開かれた。「代表して挨拶せえ」と、松尾の前に押し出されたのは落立^{おちだち}の今朝八さん。あちこちの鉦山^{きんざん}を歩いて、渡り鉦夫の免状を持ちこた。新しく世話になるときは、こん世界独特の挨拶がある。今朝八さんが片膝折って、渡り鉦夫の口上を切り出した。松尾は手で制止しながら、「そいつはいいからいいから、わしは知らんよ、そんなこと」と断った。礼儀知らずの振舞じゃ。それもそのはず、松尾は鉦山にずぶの素人で、元は畑違いのパイロットをしておった。

日本一周飛行に成功するなど、航空史上に輝かしい足跡を残したパイロット、後藤勇吉の名前を知っとるかの。太平洋横断飛行の監督に選ばれち、訓練中の昭和3年2月29日、大村海軍航空隊を飛び立って間なしに墜落して死んだ。延岡市出身で、城山公園には記念碑も建っておる。鳥人後藤勇吉の親友ということが、松尾の自慢のひとつでな。後藤勇吉が墜落死する30分前の写真を見せびらかしたり、飛行機の模型を手に操縦の話聞かせたりした。

（略）松尾は熊本県玉名郡の出身、奥さんはコトという名で東京の人じゃ。すらっと背の高い松尾と美人のコトさんが、サイドカーを走らせて岩戸へ通う姿に、土呂久の者は目を奪われた。「樋の口」に預けた青毛の馬をさっそうと乗り回す松尾は、鉦山靴でこつこつ^{きんざん}歩いて回る川田と、あまりに対照的での。土呂久鉦山の新時代の訪れを告げるようでもある。部落ん衆は、パイロットから鉦山師^{やまし}へ変身した松尾に関心を寄せた。何が目的で、山奥の亜砒鉦山^{あひやま}へ乗り込んで来たんじゃるか。土呂久鉦山をどげしようと考えちよるのか。

富高ツユ子さんの話（1979年4月20日聴取）

熊本から来た牧野さんは分析室におった。トロで出てくる鉦石を分析しよった。粉末にして、ゆり椀でゆすってパーセントをみよった。

松尾は飛行機で落ちて、腰から足にかけて肉を削った。その跡があった。飛行機の模型を持っていて、私たちが行くと、飛行機の話をして聞かせた。

佐藤ハルエさんの話（1977年2月4日聴取）

(松尾は) 日本のパイロットとして名前を知られている後藤勇吉といっしょに飛行機に乗っていたことがある。後藤の墓は延岡にある。

松尾が所長になったのは 30 歳代。奥さんを新しいサイドカーで岩戸に運びよった。エンジンを発動機をつけて、船みたいなのをこっちにつけて、バババババーと大変なものよ。

堀江武雄さんの話 (1977 年 8 月 11 日聴取)

喜右衛門の隣にもう 1 軒事務所があって、そこが中島の出向の事務所だった。

2 番坑の鉱区から鉱石が出ると、川田に聞きに来たことがある。中島が大々的にやるための下準備。上の鉱区 (富高勝次郎が埋まったところ) = 松尾さん、下の鉱区 = 川田さん。両方の事務所 (川田の事務所は川を渡ったところ。松尾の事務所は旧百熊の家) があったことがある。松尾さんの下に久世多四郎がいた。亜砒窯は松尾さんのところにはなかった。鉱石を出すだけ。いい鉱石が出ると中島に連絡して、たまに松尾が鉱石を持ってきて川田と話しているのを見た。公にはやっていない。試掘くらいだろう。

後藤勇吉が死ぬ 30 分前に写った写真を持っていた。後藤は宙がえりをして死によった。

大崎袈裟蔵さんの話 (聴取日不明)

馬に乗って歩きよった。樋の口の馬屋においてあって、馬を飛ばしてさるきよった。アオ馬だった。松尾はすらっとした立派な男。気持ちははっきりしとった。

米田嵩さんの話 (1977 年 11 月 20 日聴取)

親父の (米田) 今朝八は、川田の時代に長いこと鉱夫で出ていた。松尾さんが初めておいでになったとき、樋の口で初対面の挨拶があった。親父は「渡り鉱夫」の免状 (親分、子分の名前をずっと連ねたやつ) を持っていた。だから、砂太郎さんが「挨拶をせえ」というので挨拶した、と親父が酔うて言うた。

昔のやくざの挨拶のようなもので、片膝折ってやるのを親父は覚えていて、代表としてその挨拶をやろうとしたら、松尾さんは「それはいい、それはいい、わしは知らんよ、そげなこと」と言いよらした。

米田嵩さんの話 (1978 年 1 月 29 日聴取)

私が昭和 6 年の 11 月か 12 月に松尾さんのもとで働きだしたとき、熊本から小林とか松本という双子の兄弟とか 5, 6 名来ていた。こっちから工藤伸好、甲斐伝蔵、丸岡袈裟治 (職頭)、佐藤悦蔵、佐藤七郎、あの人たちなど全部で 15~16 人出ていた。砒鉱を掘った。昔の大切坑。その後一番坑になった所。

松尾はやせ型でのっぼ。昭和 4 年の岩戸神社の祭のとき (5 月と 9 月の 21, 22, 23 日) 平野屋の 2 階で青年たちの飲み方の席に松尾が来て、わしが「プロペラがあんなに速く

回るのに、機関銃をまっすぐ撃つのはどういうわけですか」と聞いたら、「歯車の関係で、なんぼ速く回ってもプロペラの間を縫っていくようにできとる」と説明した。

佐藤仲治さんの話（1978年6月17日聴取）

はじめ松尾が主任兼調査。昭和8年に中島になってから、所長は石黒。土方のような風さい、顔つきの悪い、色の黒い、5尺2寸くらいの小男。秋田鉱専卒で34、35歳くらい。主任できた。石黒が来てから、松尾は鉱山の調査ばかりやっていた。

松尾は鉱石を採って帰ってきて、鉄の臼で粉にする。そして粉を皿（椀）にひとつかみ入れて「椀がけ」する。分析する。結婚式の嫁さん用の椀みたいなもので、ウルシで塗ってあった。直径10センチくらいの皿を深くしたようなもの。

川の流れて水を入れて揺する。不純物が流れでて、粗い石をとって捨てて、水を入れちゃあ椀を揺すると、ヒ鉱と錫と銅とみな別になる。同じ椀の中で、お月さんの出はじめの色をした錫がいちばんあとに糸をひいたごと残る。

松尾はあちこちから持って帰った鉱石を椀がけして、錫が何パーセントと書いていく。これを資料にして穴掘りを始めるわけたい。

* 椀がけ（広辞苑） 砂中または粉鉱の状態の重い金属を選別する方法。砂を椀にとり、水を加えて揺り、砂や岩石粉を外に出して金属を残し、金属の有無を品位の見当をつける。

石黒が1年か1年半おったかな。そのあと真鍋義一が主任で来た。昭和10年か11年。真鍋になったときは大規模だった。静岡県丹那トンネルにおった20何人を連れてきた。削岩夫、手繰り、枠入れの専門家。丹那トンネルは、えらいな水にこなされたらしい。真鍋のあとに篠田恭三さんが来た。

佐藤仲治さんの話（1978年9月10日聴取）

私は松尾について何回も中野内に行った。ハンマーとかサンプル袋（5寸角くらいの布の袋）を何十枚も持って行って、採った鉱石を袋に入れて、どこの何という穴でとったと書いた紙も入れて、帰ってきてから鉄の臼で粉にする。そして椀がけによって分析した。これを資料にして穴掘りを始めるわけたい。

70-6 後藤勇吉さん

富永寿夫編纂「後藤勇吉の記録」をもとに作成

1896（明治29）年 11月12日 延岡市南町に生まれる

1914（大正3）年 3月 延岡中卒業、上京、梁瀬自動車会社の見習工

- 1915（大正 4）年 1月 退社、飛行家白戸栄之助の助手
7月 インデアン 60 馬力白戸式巖号入手。門川町尾末の海岸で独力飛行練習
11月 最初の直線飛行に成功
- 1919（大正 8）年 3月 帝国飛行協会技師となる
9月 同協会辞任。日本飛行機製作所（中島知久平経営）に入社
12月 退社。伊藤飛行機研究所の客員
- 1920（大正 9）年 9月 第 1 回郷土訪問飛行
- 1923（大正 12）年 4月 第 2 回郷土訪問飛行（一ッ葉浜）
- 1924（大正 13）年 7月 23～31 日 日本最初の日本一周飛行に成功
- 1927（昭和 2）年 6月 帝国飛行協会太平洋横断飛行を正式に表明
11月 太平洋横断飛行実行委員会で決定
監督 後藤勇吉、操縦工員 藤本昭男、海江田信武
- 1928（昭和 3）年 2月 28 日 霞ヶ浦一大村間往復長距離飛行訓練のため霞ヶ浦を出発、大村海軍航空隊着。使用飛行機：B 式艦上攻撃機
2月 29 日 午前 8 時 大村海軍航空隊を出発、霞ヶ浦に向かう途中、佐賀県藤津郡七浦村上空で機体墜落し死亡。同乗の諏訪飛行士、岡本大尉重傷

宮崎日日新聞（1983 年 5 月 30 日）より

後藤勇吉 1896（明治 29 年）～1928（昭和 3 年）

後藤勇吉が生まれたのは明治 29 年 11 月 12 日（1896）。延岡市南町で山産物商をいとなむ後藤吉太郎の四男である。彼が小学校にいるとき、明治 36 年（1903）ライト兄弟が人類最初の飛行に成功、さらに延岡中学校 2 年生のとき、わが国最初の飛行船がとび、飛行機がとんだ。その影響もあってか、「後藤勇吉の記録」（富永寿夫編）にある写真には、中学 2 年生当時自作のゴム動力双発模型機を飛ばしている姿がある。

勇吉は延岡中学を卒業すると上京、梁瀬自動車会社に見習工として入社。エンジンを勉強し、退社後は飛行家白戸栄之助の助手となる。というのも、白戸栄之助が優れた水上飛行機を製作したからである。しかし四国の高松で白戸が主催者に損害請求で差し押えられ、勇吉は仕方なく帰郷するが、どうしても飛行機が忘れられず白戸に交渉し、運賃着払いで飛行機を貸与する。門川町尾末海岸で大正 5 年（1916 年）11 月 2 日最初の直線飛行に成功する。わずか 50 メートルであったが、勇吉にとっては画期的な瞬間ともいえよう。

翌年上京、日本飛行学校の創始時代にあたるわけだが、日本自動車学校の創立者友人らと共同経営にあたる。陸軍委託操縦生に応募合格して本格的な訓練を始めたが、シベリアに出兵。除隊後、大正 9 年（1920）友人の坂東舜一とはかつて、それぞれの実家か

ら出資させ伊藤式ル・ローン 120 馬力複葉機を完成させ、勇吉の実家の屋号「南ふじや」にちなみ富士号と名づけている。この富士号で帝国協会主催第 1 回懸賞飛行競技大会に出場、高度協議で 1 位、高等競技で 1 位、速度競技で 2 位となつて、後藤勇吉の民間パイロットの位置は全国に知らせた。勇吉 25 歳のときである。

そして 9 月、第 1 回の郷土訪問飛行を行っている。延岡—宮崎—都城と連絡飛行をし、都城では飛行大会を行っている。続いて第 2 回の郷土訪問飛行は大正 12 年(1923) 4 月、宮崎(一ツ葉浜) 延岡(東海港川口) で、使用機は横廠式ロ型水偵機、同行に冒険飛行家日野俊雄をとまなっている。とくに一ツ葉海岸では勇吉のすばらしい操縦と日野の曲芸が 5 万の観衆を酔わせ、見学した宮崎第二小学校 6 年生北野好美の作文によれば、「後藤勇吉氏は日本一の民間飛行家で宮崎県の人である。日野氏は宮城県の人で縄バンゴ翼上直立の飛行機乗として日本一の人である。この二人が宮崎に来られて飛行大会が 4 月 3 日一ツ葉浜の入江で開かれた。方々から集まった人は 5 万人と云う事でちょうど飛行機の上から見た曲がったいも虫にたくさんな蟻がたかつてゐるように見えるであろうと思われた」とある。そして作文集のタイトルが「鳥か神か」とつけてある。

その翌年、勇吉は日本最初の日本一周飛行に成功。これがきっかけとなつて、航空路が次々に開け、輸送事業が進んでいく。特に本県にとって忘れられないのは昭和 2 年 5 月、早出カボチャを宮崎から大阪に運んだ点であろう。新鮮な日向カボチャを大阪市場にとのキャッチフレーズでのキャンペーンは勇吉の協力によって大きな成果をおさめている。その年、リンドバーグが大西洋無着陸横断飛行に成功、世界を驚かせた。これが刺激となつて帝国飛行協会は太平洋横断飛行を正式に声明、実行委員会で勇吉は監督にえられた。そして、その訓練のため霞ヶ浦航空隊で、航法、計器飛行、夜間飛行、霧中飛行などの訓練をはじめた。その翌年の昭和 3 年(1928) 2 月 28 日、霞ヶ浦と長崎県の大村間の長距離訓練のため霞ヶ浦を出発、大村海軍航空隊に着陸し、翌 29 日出発、帰途につく。しかし、佐賀県藤津浦上空で機体が墜落発火し、死亡。33 歳であった。当時の新聞の見出しには次のようにある。

“太平洋横断の雄凶空しく後藤飛行士墜落惨死す” “勇吉氏の死は世界的一大損失” “民間空界の先駆者、新記録には真先に活躍し十数年に事故はただ一回、世界的パイロット後藤勇吉氏” と賞賛されている。

70-7 後藤勇吉最後の記念撮影(土呂久図書館 A-2-13 DSC02149)

大阪朝日新聞昭和 3 年 3 月 1 日夕刊記事「ああ後藤飛行士最期の地」より
4 枚の写真が組んである。

1. 機が衝突した柿木、民家焼失のあと
2. 後藤氏の使用した三角定規
3. 焼け残った機の左翼

4. 最後の記念撮影（28日大村航空隊にて）。右より後藤氏、諏訪氏、岡村大尉

「後藤勇吉の記録」P137

昭和3年2月29日朝、出発を前に撮った最後の写真。

右より岡田少佐、前田大尉、中村司令、安達朝日新聞記者、後藤飛行士、永嶺隊長、岡村大尉

（松尾さんは次の写真をもっていたと思われる）

